

一八八五年三月十一日(水)

聖ラーマクリシユナ、信者の家を訪問——ナレンドラ、ギリシユ、バララーム、チュニラル、ラトウ、校長、ナラヤンたちと楽しく歓談

信者の家へ——信者たちと共に

ファルグン黒分十日目、ファルグン月二十九日、水曜日。一八八五年三月十一日。今日、午前十時ごろ、聖ラーマクリシユナは南神村をお発ちになり、在家の信者バララームの礼拝室で大聖ジャガンナータのブラサード(供物のお下がり)をいただく。ラトウ、その他の信者がお相伴をした。(訳註、ジャガンナーター——「世界の主」の意でヴィシユヌ神々クリシユナのこと)

祝福されたバララーム！君の家こそ、今日、タクルの尊い仕事場になっているのだ。新しい信者を惹きつけて、彼ら^{フレム}を愛でつながれた。そして、信者たちとどれほど踊り歌われたことか——。

まさに、聖ガウランガのシユリー・ヴァースの庭での神の愛の狂宴そのままである！(訳註、シユリー・ヴァース——チャイタニヤのごく親しい学者^{パシデト}で、この人の家でチャイタニヤは神の愛に酔って踊り狂った)

^{ドフキニシヨル}南神村のカーリー殿に坐つて、タクルはお泣きになった。自分の親しい友、心の友に会いたいと、

身も世もなく悶もえた！ 夜も寝られぬ程だった。大実母ママにお頼みになった——「マー、あの人はとても深い信仰を持っているよ！ だから引っぱってやっておくれ。マー、あの人をここに来させておくれ。その人がもし何かの都合で来られないなら、マー、わたしをそこに連れて行っておくれ。わたしが会いに行くから——」と言うわけで、タクールはバララームの家にいそいそとお出かけになるのだが人に対しては、ただ、「バララームにはジャガンナータがついていさるので、あそこの食べ物はとても清らかだから——」と説明していらっしやる。そしてこの家に来られるとすぐ、若い信者たちを招まぶようにとバララームにお頼みになるのだ——「ナレンドラとバヴァナートとラカールを招まんでおくれ。この子たちにごちそうするのは、ナーラーヤナに食物を供えるのと同じことなんだよ。この子たちは普通の人間じゃない——神さまの分身として生まれてきたんだから、ごちそうすればともお前のためになるんだよ」とおっしゃって——。

ギリシュ・ゴーシュ氏とはじめて会って話をなさったのもこのバララームの家だった。山車祭ラマチャユの盛大なお祭をして、タクールが皆といっしょにキールタンを楽たのしまれたのもここである。この家で、どれほど度々たびたび、タクールの信者同士が互いに知り合い、愛と友情を交しあつたことだろう。

〔あなたが見せてくれる神への道を見ている——若いナレン〕

校長はこの近くにある学校で教えている。十時ころ、聖ラーマクリシュナがバララームの家にみえるのと聞いていたので、昼休みの時間にそこへ行き、タクールにお目にかかつてごあいさつ申し上げた。

タクールは応接間で食後の休息をとっておられた。時々、袋の中から香辛料やカバブチニを出しては食べておられる。年若い信者たちがタクールをとり囲んで坐っていた。(訳註、カバブチニ——クベバ/ジャワコしよう/畢澄茄^{じつじょうか}。口臭消しにも用いる喉^{のど}に良い香辛料^{スパイス})

聖ラーマクリシュナ「(校長にやさしく)——お前、来れたのかい? 学校はないのかな」

校長「学校からまいりました。今、特に用事はございませんので——」

信者の一人「いえ、タクール! 校長先生は学校から逃げてきたんですよ!」(一同爆笑)

校長は心中ひとりごと——「はえー! 誰かに引っぱられて来たような感じだ!」

タクールは少し何か考えておられるようなふうだった。やがて、校長をもつと近くに坐らせて、何かと話しはじめられた。「わたしのタオルを絞っておいてくれないか。それから、上衣^{じょうま}を乾かしてくれ。それから、足がちよつと痛むから手でさすってもらえるかな?」校長は人にこまごまと奉仕することを知らないから、タクールはこうして彼に奉仕の仕方を教えて下さるのである。校長はあたふたと一つ一つ用事を足^たしている。校長は足をさすらせていただいている。聖ラーマクリシュナはさまざまな教えを下さった。

〔聖ラーマクリシュナと財宝放下の極致——正真のサンニヤーシン〕

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かつて)——えーと、これ、わたしがここ何日か感じていること、これがどういうわけか言えるかね? 金属製の物に全く触^{さわ}れないことだ。金物のコップに触^{さわ}ったら、

トゲ魚に刺されたように感じた。ズキズキ、キリキリ、手が痛みだした。水差しを使わないわけにはいかないから、タオルにくるんだら大丈夫か知らんと思つてね、そうしてみたところが、やつぱり手がズキズキ、キリキリしてとても痛いんだよ。とうとうマーにお願いしたいよ。『マー、もう二度とこういうことはしないから、今度だけは見逃しておくれ』

えーと、若いナレンがよく来るが、家じゃ何と言つてるかな？ 純粹な子で、まだ女に何の関心もない」

校長「彼の器は、とても大きゅうございます」

聖ラーマクリシュナ「うん。それからこう言っている——『靈的な話は、一度聞いたら決して忘れない』と。子供のときに、^お神さまが自分に会つてくれない」と言つてよく泣いたものです、と」

校長を相手に、若いナレンのことについてこんなふうにいると話が出てきた。ちようどそのとき、信者たちの間から一人が声をかけた——「校長先生！ 学校の方はよろしいのですか？」

聖ラーマクリシュナ「何時なんじだい？」

一人の信者「一時十分過ぎでございます」

聖ラーマクリシュナ「(校長に)——お前、お帰り、遅れるよ。仕事がすまないうちに来たんだらうから——。(ラトゥに) ラカールは何処にいる？」

ラトゥ「行きました——家に」

聖ラーマクリシュナ「わたしに会わないでかい？」

午後、信者たちと共に——アヴァターラについて——聖ラーマクリシュナ

学校がすんでから校長がバララーム家にまた戻って来てみると、タクールは応接間で信者たちにとりまかれて坐っておられる。口にやさしい微笑をうかべ、その微笑が信者たちの顔つきに反映していた。校長が戻ってきて礼拝したのを見て、タクールは彼にそばにきて坐るように手招きをなすつた。ギリシユ・ゴーシユ氏、スレンドラ・ミトラ、バララーム、ラトウ、チュニラルなどの信者たちがそこにいる。

聖ラーマクリシュナ「(ギリシユに)——お前、いちどナレンドラと議論してみろ！ あれが何て言うか——」

ギリシユ「ハッハッハッハ……。ナレンドラは、^々神は無限だ^々と言うのです。我々が見たり聞いたりするものは何でも——物であれ人間であれ——言葉で表現することなんか出来やしない。すべて神の一部なのだ。インフイニティ（無限の虚空）——それに部分などあるか？ 部分などあり得ない、というわけです」

聖ラーマクリシュナ「神が無限だろうと、どんなに大きかろうと——あの御方が望みさえすれば、ご自分の真髄を人間を通してこの世界に現あらわ前せることができるんだし、また、実際に現あらわ前れる。あの御方がアヴァターラとしてこの世に生活しておられる場合、そのことは類推比較によつて理解させることはできない。感じ取ることが必要なんだ。直覚するんだよ。比較類推すればいくらかのヒントは

得られる。牝牛めうの角にさわったら、たしかに牝牛にさわったことになるんだよ。足かシッポにさわっても、やっぱり牝牛にさわったことはたしかなんだ。だが、わたしらにとつては牝牛のなかで一番だけいなものは牛乳だ。その牛乳は乳房から出てくる。

そんなわけだから、愛と信仰を教えるために、神は人間の姿をとって時折この世に化身なさるのだ」
ギリシュ「ナレンドラは、『神のすべてを理解することができるものか、あの御方は無限なのだ』と、こう申すのです」

[PERCEPTION OF THE INFINITE (原典注し) 無限を感知すること]

聖ラーマクリシュナ「(ギリシュに) 神の全てを理解するなんてことが、いったい誰にできる？ 大きくつかむこともできないし、小さくつかむこともできない。それに、すべてを理解する必要がある？ 神を直覚できれば充分なんだ。あの御方の化身アヴァタールを見ることは、あの御方自身を見たことだ。誰かがガンジス河のそばに行つて河の水に手でさわったとすれば、その人は言うよ—— 私はガンガーを見てさわつてきた」と。

ハリドワールからガンガーサーガルまでのガンジス河全体の水に手を入れることはないさ(一同笑)

(原典註し) 無限を感知することの順序に関して、また有限について、マックス・ミュラーのヒバールト講義とギフォード講義を比較議論する。

う)。

お前の足にさわれば、お前にさわったことになるのさ、ハハハハ……。

海のそばに行つて海の水にさわつたら、海にさわったことになるんだ。火の性はあらゆるものに含まれているが、薪のなかが一番だ」

ギリシユ「はっはっはっは……。火の得られるところ、そこが私には必要なですよ」

聖ラーマクリシユナ「アハハハハ……。火の性は薪が一番。もし神の性を探すなら、人間を探すと。人間にあの御方は一番よく含まれている。法悦ウツジク・バクテイの信仰、愛フレイマ・バクテイの信仰に身を捧げている人——神のために狂気のようになっている人——あの御方の愛に酔っぱらっている人——そういう人を見たら、あの御方は間違いなくその人に化身していなさるのだと知れ。

(校長を見て)——あの御方は全てのものに遍在いなきするが、その力は多く現れている処ところと少く現れている処とがある。アヴァターラのなかには、あの御方の力が一番よく現れている。その力が、時によると完全に現れている場合もある。神の力がアヴァターラになるんだ」

ギリシユ「神は心と言葉を超越している、とナレンドラは申しておりますが——」

聖ラーマクリシユナ「いや、この普通の心で感得できないのは確かだが。しかし、純粹清浄な心で感得できる。この普通の知性ではわからないが、純粹清浄な知性ではわかる。女と金への執着がとれさえすれば、心と知性は純粹清浄になる。純粹な心と純粹な知性は一つのものだがね。神はその純粹清浄な心で感得できるんだよ。聖仙リシムや牟尼ムニたちはあの御方を見なすつただろうか？ あの方々は、靈意

識を通じて大靈に対面なすつたのだよ」

ギリシユ「ナレンドラは、私と議論して降参しましたよ、ハッハッハッハ」

聖ラーマクリシュナ「いや、ちがうよ。わたしにはこう言つてる——『ギリシユ・ゴースシユは神は人間として化身すると固く固く信じ切つております。今さら僕が反論してもムダなのです！ あれほどの信念の前では、何も言わない方がいいんです』と」

ギリシユ「はっはっはっは、先生！ 私たちはみんなワイワイと話し合つているのに、この校長さんはむつつり黙つて坐つている。何を考へてるのかなあ？ 先生！ いったいどうなんでしょうねえ、この人は！」

聖ラーマクリシュナ「（笑いながら）——口にしまりのない人、腹の底がどうしてもわからぬ人、耳にトゥルシーの葉をはさんでいる人、長いペールをかぶつた女、水藻におおわれた池の冷たい水。こういうのは非常に危険だ（一同爆笑）。ハッハッハッハ……。でもこの人（校長）はちがうよ。この人は実に謹厳実直だ」（一同大笑）

ギリシユ「先生！ その聖句は何を言つているのですか？」

聖ラーマクリシュナ「こういうものに対しては、人は用心しなげりやならんのだ。第一に口にしまりのない人——だらしなくいいかげんなことを言う。次に腹の底がわからぬ人——心を押し量つても、何を考へているのかさっぱりわからない。それから耳にトゥルシーをはさんだ人——耳に神木のトゥルシーをはさんで、どんなに自分が信心深いか宣伝しているんだよ。長いペールの女——長いペー

ルを頭からかぶっていることで、自分は人並外れて貞節な、しとやかな女だと宣伝しているんだ——ところがそうじゃない。それから水藻におおわれた池の水——これで沐浴するとチフスにかかる。ハッハッハッハ」

チュニラル「この方は、いろいろ言われているのですよ。若いナレンとバブラームはこのかたの生徒ですし、ナラヤン、パルトウ、プールナ、テージチャンドラ——みんなこのかたの学校の生徒です。彼等をここに連れてくるので学業成績が落ちてきたと、世間では言っております！　それで、このかたの評判が悪くなっているのです」

聖ラーマクリシュナ「そんな評判を、誰か信じる人がいるのかい？」

こんな会話をしていると、ころへナラヤンが入ってきてあいさつをした。ナラヤンは十七、八才の色白の学生で、タクール、聖ラーマクリシュナに大そう愛されている。タクールは彼に会いたくて、何か食べさせたくて、もう夢中でいらつしやるのだ。この南神村ドッケーネーシヨルにいて、ナラヤン会いたさに泣いておられることもある程だ。ナラヤンを、タクールは大神ナーラーヤナの化身だと思つていらつしやるのだ。

ギリシユ「(ナラヤンを眺めて) 誰が知らせた？　みんな、この校長さんの責任だ」(一同大笑)

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッ、アハハハハ。ひどい奴だ！　口をつつしめ！　それでなくともこの人に悪い評判がたっているのに！」

〔食物の心配なやみが一番苦しい——バラモンが布施を受けた結果〕

また、ナレンドラの話が出た。

一人の信者「近ごろあまり来ないようですが、どうしたのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「食物の心配は一番苦しい。カーリダーサさえ正気を失くす」（一同笑う）（訳註、カーリダーサー―五世紀ころ活躍したインド古典文学でとても有名な詩人、劇作家。代表作として『シャクンタラー』『ラグ・ヴァンシャ』などがある）

バララーム「シヴァ・グハ家の息子のアンナダ・グハとよく付き合っているようでございますよ」

聖ラーマクリシュナ「うん。何とかいう役人の家に、ナレンドラやアンナダたちみんなが行くんだ。そこでブラフマ協会の集まりをしているんだよ」

一人の信者「その役人はタラバダという人です」

バララーム「バラモンたちが言っておりますよ――アンナダ・グハという人は大そう高慢な人だと、はははは」

聖ラーマクリシュナ「バラモンたちの言うことを聞いちゃいけない。あの連中のことはよく知っているだろう。金や物をくれない人は悪い人で、気前よくくれる人は善人なんだ！（一同笑う）アンナダはわたしも知っているが、いい人だよ」

信者たちと楽しく讃詞をうたう

タクルルは歌を聞きたいと希望された。バララーム家の応接間は人でいっぱいだ。皆、一様にタクル

ルを見つめている。おっしやることは一言もささず聞こう、なさることは一つ残らず見よう、というのである。

タラパダ氏は歌った――

ケーシャヴァよ、惨めな我らを憐れみ給え
森の木の間をそぞろ歩くマータヴァアよ

我らを魅惑し、やさしく心を盗み給う人よ

(おお ハリ、ハリ、ハリ、ハリ、ハリ)

君はヴラジャの永遠の若人

恐ろしき毒蛇カーリヤを馴らして

わが悩み、苦しみを除き給い

弓形の目、孔雀の羽根かざりで

ラーダーの胸を喜びにわきたたせ

ゴーヴァルダナの丘を指で持ち上げし

御身を飾るは香ぐわしき森の花々

ダーモータラよ、カンサをこらしめ給う方よ

色、あくまで濃く美しき人よ

ケーシャヴァ、マータヴァア、ダーモータラ、
いずれもクリシュナの愛称

ケーシャヴァー『長い髪のを持つ者』の意
マータヴァー『ヤーダヴァ族の王マドゥウの
子孫』の意

ダーモータラー『腹に縄を巻かれた者』の意
カンサー『邪悪な叔父』

牧場の乙女らと踊りたわむれし人よ

(おお ハリ、ハリ、ハリ、ハリ、ハリ)

聖ラーマクリシュナ「(ギリシユに)——あー、いい歌だねえ！　こういう歌も、みんなお前が作るのかい？」

一人の信者「はい、この方が、チャイタニヤ・リーラーの歌を全部、お作りになったのでございます」
聖ラーマクリシュナ「(ギリシユに)——この歌は最高の出来だよ。(歌い手に)ニタイの歌が歌えるかね？」

再び歌になって、歌い手はニタイの歌をうたう——

(チャイタニヤの一の弟子ニティヤ・ナンダ(ニタイ)がクリシュナに対して、ラーダーのような愛を持って信者たちにすすめる歌)

ラーダーの愛を持つといで

愛の満ち潮押しよせて

愛の流れは百の川

望みのままに汲んどくれ

1885年3月11日(水)

愛のラーダーは身を溶かし
望む誰にも愛を注ぐ
ラーダーの愛で胸満たし
ハリの御名をとなえよう

愛に命は酔いしれて
愛の波間に踊りだし
ラーダーの愛でハリを呼ぶ
さあ さあ おいで 皆おいで

こんどは聖ガウランガの歌――

あなたは誰だ、ガウルの姿をして
ああ命の渴きをいやしてくれるのは
海に愛の嵐がふき狂って
血統ちすじの誇りなど、もう用はない
(ガウルよ、私はあなたに首ったけ)

ヴラジャの野に、牛飼いの姿をして
牝牛めうしの世話をなさったあなた

すてきな竹笛を吹いて

ゴープーたちを夢中にさせたあなた

(ガウルよ、私はあなたに首ったけ)

ゴヴァアルダナの丘を持ち上げて

プリンダーヴァンを護って下さり

もつたいたなくもゴープーの足もとに

月のお顔を伏せて涙を――

(ガウルよ、私はあなたに首ったけ)

皆は校長に向かつて、あなたもぜひ何か一つ歌ってくれ、としつこくせがむ。校長は恥ずかしそうに小さな声でしきりに断わっている。

ギリシュ「(タクールに)――先生！ 校長さんはどうしても歌わないんですよ、ハッハッハッハ

……」

聖ラーマクリシユナ「少しムツとして」——学校じゃ一日中大きな口をあけてしゃべってるくせに、ここで歌をうたうのがそんなに恥ずかしいのか！」

校長は酸っぱい表情をしてそのまま黙って坐っていた。

スレシユ・ミトラ氏が少し離れたところに坐っていた。タクール、聖ラーマクリシユナは彼の方をやさしくご覧になり、ギリシユ・ゴーシユを指してニコニコしながらこうおっしゃる。

聖ラーマクリシユナ「ハッハッハッハ、お前は前に道楽をしたって？ でも、この人にはかなわないよ！」

スレシユ「はあ、おっしゃる通りで——。その点ではそちらの方がずーっとお兄さんです。ハッハッハッ……」(一同大笑)

ギリシユ「(タクールに)——やれ、やれ、でも先生！ 私は子供のころからロクな教育を受けておりませんが、人は私のことを博学だと言ってくれますよ！」

聖ラーマクリシユナ「マヒマー・チャクラバルティは沢山たくさん、お経や聖典を勉強して——たいたしたものだよ！(校長に)——なあ、そうだろ？」

校長「はい、おっしゃる通りでございます」

ギリシユ「何が？ ただの知識ですか？ そんなものはいやというほど知っていますよ！ もう二度と、そういうものに騙だまされません」

聖ラーマクリシユナ「アハハハ……、このところ(わたし)の考えを知ってるかね？ 本や聖典はみ

聖ラーマクリシユナ「ハハハ……、学者はよくえらそうなことを言うが、目はどこを見ている？ 金とそれから女、つまり肉体の快楽と金だ。ハゲタカは空高く舞っているが、目は墓穴を見ている、ハハハハ。探してるものはただ——獣の死体はどこだ、墓穴はどこだ、死骸はどこだ——。

(ギリシユに)——ナレンドラは非常に優秀だ。歌も上手いし、楽器を弾くのも上手いし、学問もよくできるし、聡明だ。それに感覚器官を支配することもできるし、識別離欲の精神があつて誠実だ。沢山いい性質をもっている。

(校長に向かつて)——え、どう思う？ どうだね、大そう秀れていると思わないかね？」

校長「は、おっしゃる通りです。非常に秀れた青年でございます」

聖ラーマクリシユナ「校長にだけ、ソツと」——ね、あれ(ギリシユ)は大そう熱心で、信念が強いよ。校長はおどろいてギリシユの方をじつと見ている。ギリシユはタクルのところにいつい最近来るようになったばかりである。だが校長には、十年の知己のように感じられた——長い間、親しく話し合った仲間——心の友のように。一連の首飾りの宝玉の一つだ。(訳註——タクルの熱心な信者たちを一連の首飾りにたとえている)

ナラン「先生！ あなた様の歌をきかせていただけませんか？」

タクルはあの甘い声で、大実母の名を讃える歌をおうたいになった——

胸に抱いた大事な宝玉

愛しいシャーママさん見えるのは
心よ、お前とわたしだけ
ほかの誰にも見えやせぬ

欲の惑わし さらりとすてて
ひとり 清らかな心で見よう
でも 舌だけは残しておいて
ときどき甘えて マー、マーと呼ぼう

いやな臭いや 味するものは
そばに決して寄せつけぬよう
智慧の眼 いつも光らせて
油断をせずに 気をつけていよう

次にタクルは、三大苦悩に悩んでいるこの世の人間の気持ちになって——大実母マに向かって文句でも言うように歌われた。(訳註、三大苦悩——自然現象から受ける苦悩、他人や動物から受ける苦悩、精神的な要因から生ずる苦悩)

おお 至福の大実母よ、私を悲しませないでくれ

あなたの二つの御足のほかは、私は何一つ知らないのだ

日に月に重なる苦しみを、慰めてくれる人もないが
生まれたからには、この世の海を渡るより仕方がない

果てなき海に投げ入れたのがあなたとは、われ夢にも知らず

私は夜も昼もドウルガーの名を呼んでいるが、心配の種は尽きず

私が今死ねば、ドウルガーの名も消えるのだろうか

それから、ブラフマンの永遠の歓喜についてお歌いになる――

よろこびに我を忘れて

大実母はシヴァと踊りたわむれ

美酒飲みて、ゆらりゆらりと

よろめけど倒れはせず

シヴァの胸の上ですつくと立ち

マーのみ足もと、世界は震える

マーとその配偶つま(シヴァ)は歓喜して
恥ずかしさも恐れも眼中になし

信者一同、シーンとして歌に聞き入っている。彼等はみな、タクールの驚くべき忘我法悦の境を凝視している。

歌は終わった。少し間をおいて、タクール、聖ラーマクリシュナは、「今日はいま歌えなかった——風邪気味なんだよ」とおっしゃった。

夕べの語り

次第に日が傾いてきた。薄暗い無限の影があたりを覆いはじめ、聖なるガンガーの方から吹いてくる夕風に吹かれていると、取るに足らぬ凡夫の胸の中にさえ、何かしら神聖な気分が湧いてくる。見渡すかぎりの世界を明るく照らしていたあのお日様は、いったい何処にいらっしゃるのだろうか？と子供は思うだろう。また、子供のような性質をお持ちのこの大聖者さまも、そう思いになるのだ——お日様が沈んだ、不思議だなあ！誰がこんなふうにするんだろう？鳥たちは樹々の枝に帰って、まるで唱名しているかのようにさえずっている。人々のなかで靈的に目覚めた人たちもまた同じように、夕暮れになると原因の原因でおわす大宇宙の主なる御方あるじの名を、静かに念じているのである。話はずんでいるうちに、日はとつぷり暮れた。部屋に坐っていた人々は、そのままそこに坐りつ

づけていた。聖ラーマクリシユナが美しい声で称名しておられるのを、熱心に耳をそばだてて聴いている。こんな甘美な称名を、彼等はいままで聞いたことがない。——甘露の雨がふり注いでいるかのようだ。こんな愛くるしい子供が、マー、マーと叫んでいるような称名を、彼等は聞いたこともないし、見たこともなかった！ 空、山、大海、荒野、森、これらをすべて見つくす必要がどこにある？ 牝牛の角や足や、体の様々な部分を検分する必要がある？ 慈悲深い師の君が、牝牛の乳房のお話をされたが、この部屋でその乳房を見ているのだろうか？ 皆の不安な心が安らかになつたではないか？ 悲悩の地だつたところが、喜びの洪水になつたではないか？ 信者たちは、平安と歡喜をここで見いだしたのではないか？ この愛に満ちたサンニヤーシンは、無限絶対の神が美しい人間の形をとつた姿ではないだろうか？ 焼けるような渴きを癒すことができるところは、まさに此処ではないか？

アヴァターラであるにせよ、そうではないにせよ、とにかくこの御方に心を明け渡してしまつたら最後、もう逃げ出す方法はない！ この御方こそ、我が生涯の北極星(支柱)と決めたのだ。さあ、見よう！ この御方の胸の湖に、あの大生命の元祖の神がどのように映っているのかを——。

信者たちはそうした思いを胸に抱きながら、聖ラーマクリシユナの尊いお口から発せられるハリの名と大実母の名を聞き、この上ない果報を感じている。称名が終わると、タクールはお祈りになった。至聖が愛の体をとつて、人々に祈りの仕方を教えて下さっているようだ。

「マーよ、わたしはあなたにすべて委ねます。すべてを委ねます。だからマー、あなたの蓮華の足元

にかくまっておくれ。肉体の安楽もいらぬ、マ―！ 人から認められたくもない。神通力もいらぬ。ただ、あなたの蓮華の足に純粹きれいな信仰を持てるようにしておくれ——無私無欲で、従順で、無条件な信仰を持てるようにしておくれ。それからマ―、あなたの世にも魅惑マヤ的な現象に迷わされないように——あなたの現象の世界にね。女と金を、もう二度と好きにならないようにしておくれ、マ―！ あなただけがわたしのもの！ わたしは礼拝おまつりも足りない、修行も足りない、智慧も足りない、信仰も足りない。どうぞ、蓮華の足に対する信仰を与えておくれ」

モニは思つた——尊いお口からでる称名のガンガーが油のように絶えまなく流れているのに、この御方にとって今さら決まりきつた夕べの称名など必要だろうか？ モニは後になつて、タクールは人々の教導のために人間の形をとつておられたのだ、ということをはつきり悟つたのであつた。

「ハリよ あなたはヨーギーの姿で 称名したり 歌つたり——」

ギリシユはタクールに、「ぜひ、今晚おそおいで下さい」とお招きしていた。

聖ラーマクリシュナ「あんまり晩おそくなり過ぎるんじゃないかい？」

ギリシユ「いや、あなた様のお好きなお出で下さいまし——。私は今日、どうしても劇場に行かなくてはなりませんので——。もめごとができて、その仲裁をしなければならなくなつたのです」

大通りでの聖ラーマクリシュナの神聖な驚くべき境地

ギリシユに招かれたので、夜、行くことになつた。今、九時だが、バララームはタクールに召し上

がつてただこうと思つて夕食の用意をしている。バララームにがつかりさせまいと、タクールはギリシユの家に行くときこうおっしゃった。——「バララーム！ 作つてくれたものをギリシユの家を持つてきてくれ」(訳註——一般的にインドでは夕食を食べるのが遅く、早くて八時半くらいからである)

二階から下りて来られる途中で、また神聖な気分^にに圧倒されてしまわれた！ まるで酔つたような様子だ！ ナラヤンと校長がお伴している。後からラーム、チュニラルほか、大勢がついてくる。信者の一人が、「誰がお伴をいたしましたでしょうか？」とお聞きした。タクールは「一人でたくさんだよ」とおっしゃる。階下におりるや否^{いな}や、もうどうしようもないほどの恍惚境に入られた。転ばないやうにとナランが腕をお支えた。タクールはそれをうるさげに振り払つてしまわれた。少したつてタクールは、ナランにやさしくおっしゃった——「手をひかれて歩いたら、人に酔つぱらいだと思われるよ。わたしは自分で歩けるさ」

ポスパラの十字路を渡つてちよつと行つたところがギリシユの家だ。どうしてこんなに急いでお歩きになるのだろうか？ 信者たちはあとにとり残された。神への想いで心が占められていらつしゃるのだらうか？ 『ヴェータ』では、心と言葉を超越したもの^のと説かれた存在のことを想つて、まるで氣狂いのように歩かれるのであらうか？ 今しがたバララームの家で、「それは言葉と心を超えたものではない。あの御方は純粹な心で、純粹な知性で、純粹な魂で感知できる」と語られた。その通り、タクールはその対象をじかに見ておられるにちがいない！ ——存在するものは何であれ、それはあなた(神)である^と。

向こうからナレンドラがやってきた。ナレンドラ！ ナレンドラ！ といつもは気狂いのようになるのに、今はそのナレンドラが目の前に来て口をおききにならない。この状態が聖ガウランガの境地の一つであった半三昧なのだろうか？

誰にこの境地を理解できよう？ ギリシユの家がある横丁で立つておられる。信者たちもいっしょである。こんどはナレンドラと会話をなさる。

「息子や、元気かい？ わたしは今しがた、口がきけなかつたんだよ」一言、一言、やさしさが塗りこめられている。まだ門口には着いておられない。と突然、立ち止まられた。

ナレンドラをじっと見つめながらこうおっしゃる——「言うどね——これは一つのもの（身体？）、あれは又一つもの（世界？）だ。

個霊、世界！ 半三昧のなかで、これをどのように見られたのだろうか？ それはタクールだけが存知のこと。口もきけぬほどの感動でごらんになったことなのだ！ 一言、二言、口にされた言葉は、まさにヴェエータの言葉のよう——天からの声のよう——或いは無限の大洋の波打ちぎわに

（訳註1）チャイタニヤには三つの境地があった。

一、普通（外部）意識状態——称名讃歌のキールタンができる。

二、半意識状態（半三昧）——外界の意識が少し残っていて踊ることは出来ても話はできない。

三、深奥意識状態——全く外界の意識はなく至聖と対面して三昧境に入り、ジャダ・サマーディ（無分別三昧）になる。

行つて感動のあまり満足に口もきけぬ、といった様子か。または、無限永遠の波動を不断につづける完全神秘の音響(オーム)の一つ二つが、我が耳の穴に思いがけなくも入つてきたかのようであつた。

タクール、信者たちの間に——新聞——ニティヤゴパール

門口にギリシユが立つていた。タクール、聖ラーマクリシュナを家のなかにご案内した。タクールが信者たちと内ぶつにお入りになると、ギリシユは丸太ン棒のようにタクールの前に横たわつた(訳註——全身を真っ直ぐに投げ出してする最高の礼拝、五体投地の礼拝)。タクールにうながされて御足の塵を額にいただいてから、皆といつしよに二階の応接間に行き、タクールに坐つていただいた。信者たちはせかせかと席についた。皆一様に、なるたけタクールの近くに坐つて、あの甘露の法雨を飲みたいと思つてからであつた。

席にお着きになろうとしたとき、タクールはそばに新聞がおいてあるのをご覧になつた。それには俗世の記事で埋まっている——商売の話、ゴシップ、中傷など……。だから、タクールの目には不浄に見えたので、片付けるようにと合図をなさつた。

新聞がとり除かれると、お坐りになつた。

ニティヤゴパールが進み出てごあいさつした。

聖ラーマクリシュナ「(ニティヤゴパールに)——あつちへは？」(訳註——彼はしばらく南神村トウキョウキョウシヨウにこなかつたので、なぜか? という意味)

ニティヤ「はい、南神寺ドッキネーシヨルにはまいりませんでした。体が悪かったものですから——痛みがひどくて」
聖ラーマクリシュナ「今はどんな具合だね？」

ニティヤ「よくないんです」

聖ラーマクリシュナ「心の調子を一、二段、下げている」

ニティヤ「人間が嫌なんです。いろいろ言うので——恐ろしくなるのです。でも、時々は勇気が出るのですが——」

聖ラーマクリシュナ「それが当たり前だ。誰といつしよに暮らしているんだい？」

ニティヤ「ターラク（原典註2）です」

聖ラーマクリシュナ「ナングタがよく言っていたがね、彼のいた僧院ひとに一人、神通力を得た魂ひとがいたそうだ。その人はいつも空を見ながら歩いていたそうだよ。そういう人でも仲間が一人いなくなったら、とても悲しんでガツカリしていたそうだよ」

話しておられるうちに、タクルは恍惚ぼうぜんとなられた。何か霊妙なものを見ておられるのか、茫然ぼうぜんとして口もおききにならない。しばらくしてから、「お前も来てるのかい？ わたしも来てるよ」とおっしゃった。

この言葉が誰に理解できよう。これは神々の対話か？

（原典註2）ターラク——ターラクナート・ゴシヤル。後のスワミ・シヴァーナンド。

内輪の信者たちと共に——神の化身についての議論

大勢の信者たちが来ていて、聖ラーマクリシュナのそばに坐っている。ナレンドラ、ギリシユ、ラーム、ハリバダ、チュニラル、バララーム、校長、等々。

神が人間の姿に化身する、つまりアヴァターラというものをナレンドラは信じていない。一方、ギリシユは、神はその時代その時代に人間としてこの地上に化身される、ということを固く信じて疑わない。タクールはこの問題について、兩人が討論することを心から望んでおられる。聖ラーマクリシュナはギリシユにおっしゃる——「ちよつと英語で二人して討論してみろ！ わたしが聞いているから——」

というわけで討論がはじまった。英語ではなくベンガル語で——ときおり英語の単語がまじった。ナレンドラは言う——「神は無限です。だから神を理解することは、我々の能力を超えたことです。それに、あの御方はすべての人の中に宿っておられるのであって——ただ一人の特定の人間の中にだけ降くだってくる、というようなものではありません」

聖ラーマクリシュナ「(やさしく)——この子の考え方と、わたしの考え方は同じだよ。そうだと、あの御方はどこにでもいなさる。けれど、も一つ——シヤクテイ力がそれぞれにちがう。あの御方は、或る処には無明無知アズイヂキヤの力として現れるし、また或る処には明知サツチキヤの力として現れる。それから或る容器いれもの(個々の生物)には沢山、また或る容器には少なく、という具合にね。だから、人間はみな、平等おなじじゃないんだ」

ラーム「こんな空しい議論をして何になります?」

聖ラーマクリシュナ「(ムツとして)——いや、そうじゃない、こういう議論にはちゃんと意味があるんだ」

ギリシユ「(ナレンドラに)——神は肉体をとってこの世に現れない、ということが、君にはどうしてわかるんだね?」

ナレンドラ「あの御方は、心と言葉を超越せるものだからですよ」

聖ラーマクリシュナ「ちがう。あの御方は純粹清浄な知性フンディによって知ることが出来るものだ。この純粹知性と純粹真我シュブダートマは一つのもので、見神者リシたちはこの純粹知性と純粹真我を通して、純粹真我と対面しなすったんだよ」

ギリシユ「(ナレンドラに)——人間として化身しなかったら、いったい誰が我々に教えてくれるのかな? 人間に正しい知識と信仰を与えるために、あの御方は我々と同じような肉体をまとってこの地上においてになるのだ。そうでなけりゃ、誰が真理を教えてくださいるんだね?」

ナレンドラ「どうしてですか? 神は一人一人の心の内部おくから教え導いてくださるんですよ」

聖ラーマクリシュナ「(やさしく) そうだ、そうだ、内なる案内者アンタルヤミとして、あの御方はわたしらを導いてくださるんだ」

その後で物凄い議論になった。インフィニティ(無限)がどうして部分になれる? それにハミルトンは何と言った? ハーバート・スベンサーは何と言った? ティンダルやハックスレーは、じゃ、

どう言っている？ ということになっていった。

聖ラーマクリシユナ「(校長に)——やれやれ、わたしやこんなことは苦手だよ。わたしや、みんな見ているんだから——今さら討論する必要がないもんだから——。わたしや、見たんだもの——あの御方がすべてなんだ！ あの御方がすべてのものになっていなさるんだ。あれも然りしか、また、これも然りしか。ある状態においては心と知性が不可分のものに溶けこんでしまう。ナレンドラを見るとわたしの心は、完全なる一者に融合とけこんでしまうんだよ。

(ギリシユに向かつて) お前、このこと、どう思う？」

ギリシユ「はっはっはっ……。このこと以外なら、たいがい分かるんですがね」(一同笑う)

〔ラーマヌジャと制限不二論〕

聖ラーマクリシユナ「わたしはね、三昧から二段くらい下りてこないと口がきけないんだよ。

ヴェーダーンタにも、シャンカラの覚った真理(不二元論)もあるし、ラーマヌジャの制限(不二論)もある。

ナレンドラ「制限不二論というのはどういう説ですか？」

聖ラーマクリシユナ「(ナレンドラに)——これはラーマヌジャの考え方でね、生物と世界の形になったブラフマン、というわけだ。皆ひっくりかえって一つのもの、ということ。

一つのベルの实のようなものさ。ある人が殻からと種たねと果肉みを別々にした。ところがベルの实の目方を

測らなけりやならぬことになった。そのとき、ただ果肉だけ測つても、ベルの實の目方にはならないだろう？ 穀も種も果肉もいっしよに測らなければならぬ。はじめの間は、穀はダメ、種もダメ、果肉だけが本當に役に立つだいなところ、と、こう感じている。その先また、よくよく考えていくと——果肉を含んでいる実体に、穀も種も含まれている。つまり、穀や種がなくては、果肉そのものもあり得ない、ということを感じるんだよ。先ず、これでもない、あれでもないと否定に否定をかさねていく。それは生物ではない、この世界でもない、というふうだね。ブラフマンだけが実在、実体で、あとはみな非実体だよね。その後で覚るんだよ。穀も種も、果肉の持主に属している——つまり、ブラフマンという全体あつての生物と世界だと。永遠不動あつての変化活動だと。紙の表裏のようなものだ。だからラーマヌジャは、生物と世界はブラフマンの局面だと言うんだ。これを制限不二論というんだよ」

見神 (GOD VISION) —— アヴァターラを見ることは本當に出来る

聖ラーマクリシュナ「(校長に)——わたしは直接に見ているんだからね、それを。今さら考え直したつてはじまらんさ。わたしには見えるんだ——このあらゆるものになつていなさるの、神ご自身

(原典註3)、「こんなこと」のベンガル語は、エイグリであるが、タクルルは、イグノ、という方言を使つて愛らしい口調で話された。

なんだと。あの御方が生物や世界になつていなさるんだ。

だが、靈意識チャイタニヤが目覚めなければ大靈チャイタニヤを知ることが出来ない。頭ヴァイチャラで考えるのはいつまでだろう？。あの御方をつかむまでだ。口で言うだけじゃ仕様がな。このわたしは、神がすべてのものになつていなさるのが見えるんだからね、はつきりと。あの御方のお恵みによつて靈意識がめざめること、これが何より必要なことさ！。それが目覚めると三昧になつて、時には体のことさえ忘れてしまう。女と金に対する執着がすっかり無くなつて、靈的な話よりほかは関心が持てなくなる。俗っぽい話を耳にするのが苦痛になる」

〔明らかな啓示 Revelation——ナレンドラへの教訓——カーリー即ブラフマン〕(原典註)

靈意識チャイタニヤを得たら、靈チャイタニヤを知ることが出来る。

いろいろ話し合つた後で、タクール、聖ラーマクリシュナは校長に説明して下さつた——

「考えることによつて或る種わかのものが知り、深くそれを冥想することによつて、また或る種の理解が得られる。それから、あの御方が見せてくださるときは、また前の二つとは別なことがわかる。あの御方もし見せてくだされば——これをアヴァターラヴァイチャラと言うが——あの御方もし、ご自分の人間としての活動リーアを見せてくださる場合は、もう考える必要もないし、誰かに教えてもらふ必要もないよ！。どんな具合にわかるかつて？。暗闇くらやみの部屋で一生懸命にマッチをこすつているうちに、突然パツと火がついて明るくなる——そういう具合に、あの御方もし、パツと光をくだすつたら、疑いは全部消

えてしまう。頭で考えていて、こんなふう^{さごと}に覚ることが出来るかい？」
タクルはナレンドラをそばに坐らせて様子をお聞きになったり、いろいろとやさしくいたわられた。

ナレンドラ「（聖ラーマクリシュナに向かって）カーリーの瞑想を三、四日したのですが、何にも起こりませんでした」

聖ラーマクリシュナ「だんだんわかってくるよ。カーリーといつても別なものじゃない。ブラフマンである御方が、同時にカーリーなんだからね。カーリーは根元^{アダイヤンヤクティ}造化力。それが不動のとき、ブラフマンというだけだ。創造、維持、破壊をするとき^{シヤクティ}力と呼ぶんだ。お前がブラフマンと呼んでいる御方を、わたしはカーリーと呼んでいるだけなんだよ。

ブラフマンとカーリーは不^{おなじ}異だ。火と燃える力のようなものだよ。火を思えば燃える力を思わぬわけにはいかない。カーリーを認めたらブラフマンを認めなけりやならんし、ブラフマンを認める人はカーリーを認めなければならぬ。

ブラフマンとシヤクティは不^{おなじ}異だよ。あれをシヤクティと、あれをカーリーとわたしは呼んでいるんだ」

（原典註4）カーリー——God in His relations, to be conditioned.（神との関係——条件付き）

ブラフマン——The Unconditioned, the Absolute.（無条件——絶対）

夜は更けていった。ギリシユはハリパダに「劇場に行くから、馬車を呼んでくれないか」と頼んだ。ハリパダが部屋を出かかると、タクールは笑いながらおっしやつた。

聖ラーマクリシユナ「馬車を呼んでくるんだよ、忘れるなよ！」(皆笑う)
ハリパダ「そのために出ていくんですから、アハハハ……」

〔神の体得とカルマ——ラーマ(神)とカーマ(欲望)〕

ギリシユ(タクールに)——あなた様をおいて、また劇場に行かなければなりません」

聖ラーマクリシユナ「いいよ。これとあれと、二つをつかんでいなきゃならないからね。ジャナカ王はこれもあれも両方つかんで、コップのミルクを飲んでいたよ」(一同笑う)

ギリシユ「劇場のことは、若い連中に任せてしまおうかと考えてもいるのです」

聖ラーマクリシユナ「いやいや、今まで通りでいいんだよ。大勢の人のためになることだもの——」
ナレンドラ「(小さな声で)——今の今まで、神だとかアヴァターラだとか言っていたのに！　すぐまた劇場にひきつけられて！」

三昧境にて——聖ラーマクリシユナ、法悦に酔いしれて

聖ラーマクリシユナはナレンドラをすぐそばに坐らせてじつと彼を見つめておられたが、突然、彼の方に身をよせていかれた。ナレンドラはアヴァターラを信じない——そんなことはどうでもいいで

はないか？ タクールの愛はますます増えて、まさに沸きこぼれるばかりであった。ナレンドラの体を手でさわりながら、歌の文句を口ずさんでいらっしやる。

「誇りを傷付けられたと思っっているのかい？ それは構わないよ。私たちは構わないよ。私たちだってそうなんだから」(訳註——プリンダーヴァンでクリシュナの恋人ラーダーに向かつて、ほかの女友達ゴレヒが言った言葉)

ヴィチャラ
〔議論は神をつかむまで〕

「(ナレンドラに)——考えたり議論したりしているうちは、あの御方がわかっていないんだよ。お前たちはさかんに議論していたけれど、わたしは好きじゃないよ。

招待客のいる家では、いつまで騒がしい？ 客人が食卓につくまでさ。テーブルについて、ルティやカレーが出てくると、とたんに物音は少なくなる(一同笑う)。次の料理が運ばれてくると、もつと静かになる。食後のヨーグルトが出ると、ただ、スプツ、スプツという音だけ——。すっかり終わると寝る時間だ。

神のことがわかってくるにつれて、思考や議論は少なくなってくる。あの御方をつかんでしまえば、もうやかましい議論などはしなくなる。つまり、安眠——三昧だ」

こうおっしゃって、ナレンドラの体をなでたり口を手でさわったりなさりながら、「ハリ、オーム。ハリ、オーム。ハリ、オーム」ととなえていらっしやる。

どうしてこのようになさるのだろう？ 聖ラーマクリシュナはナレンドラのなかにナーラーヤナの

顕現をごらんになったのだろうか？　これが、人に神を見る、ということなのだろうか？　何という
 靈妙不思議なことだろう！　見る見るうちにタクトールの意識は遠ざかっていく。外界を認識する力が
 なくなっていく。これが聖ガウランガの境地の一つである半意識状態というものなのだ。まだナレン
 ドラの足に手をおいて——ちょうど、大神ナーラーヤナの足をさすっているかのよう。——そして
 また、体を手でおさすりになる。どうして、足をさすったり、体をさすったりなさるのだろうか？　ナー
 ラーヤナに奉仕しておられるのだろうか？　それとも、力を注いでおられるのだろうか？

こんなことを考えながら見ていると、また変化が起こった。こんどはナレンドラに手をあわせて何か
 おっしゃるのだ！　——「歌をひとつ——そうすればよくなる——何とか立てるようになるよ！　ゴ
 ラ(チャイタニヤ)の愛に酔いしれて(私のニタイ)」

またしばらくの沈黙——絵のように不動のまま。再び法悦に泥酔したご様子でおっしゃる——

「ほら、気をつける、ライ(ラーダー)——ヤムナー川に落っこちるぞ——クリシュナに氣狂いみたい
 に夢中になって」

再び大恍惚境！　そして——

友よ！　まだ着かないの？

私の美しいシヤーマ(クリシュナ)がいる森に

クリシュナの香りが漂ってきて

私は疲れて もう歩けない！

そして今は、外界のことはすっかり忘れて、誰のこともおわかりにならない。ナレンドラが正面に
いるのに、ナレンドラにさえお気がつかず、いまだここにいるかということさえ忘れていらっしやるの
だ。今は、心も魂もそっくり神さまのところに行ってしまったのだ！。魂までも酔いしれておられ
るのだ。

「ゴラの愛に酔いしれて！」大きな声でこうおっしゃって、突然タクトルは立ち上がられた！ そし
て又、お坐りになってこうおっしゃる――

「ホラ、光がやってくる――でも、どっちの方からあの光が来るのか、まだよくわからない」

こんどはナレンドラが歌をうたい出した――

君に会いて、わが悲しみはすべて去り

その美しさに、わが命は溶けたり

君ゆえに、七つ世の苦惱くるしみは消え

ましてや、つたなき我などは――

歌を聞きながら、聖ラーマクリシュナは外界のことはすっかり忘れて、再び目を閉じて不動の姿に

なられた！ 入三昧境！

三昧が解けた後、こうおっしゃった。

「誰がわたしを連れて帰ってくれる？」

まるで子供が、夜、連れを見失ったときのようなご様子である。

夜はすっかり更けた。ファルゲン月黒分十日目なので暗い夜だ。タクールは南神村ドフキネノシヨルのカーリー寺にお帰りになる。馬車にお乗りになるところだ。信者たちは馬車のそばに立っている。——タクールがお乗りになるとき、みんな注意深くお助けした。まだ、酔いしれておられるのだから！

馬車は出発した。信者たちは家路についた。

弟子、校長の思うこと

頭上に星のきらめく夜空をいただき、胸のキャンパスにあの靈妙不思議な聖ラーマクリシユナの姿を思い返している信者たち——目にはまだ、あの愛のバザールが吉夢のようにありありと——カルカッタの大通りを信者たちは家に向かっている。誰か、春風に浮かれたような調子で、さっきの歌を口ずさみながら歩いている——

君に会いて、わが悲しみはすべて去り

その美しさに、わが命は溶けたり

モニは考えながら歩いている——「まったくのところ、ほんとうに神は人間の姿をとってこの世に生まれていらつしやるものだろうか？ アヴァターラというのは真実だろうか？ 無限者である神が、十四シア（170cm）の人間におなりになるのだろうか？ 無限者が有限になり得るのか？ 考え出すと際限きりがなかった。しかし、考えることによつて何か理解できるだろうか？

聖ラーマクリシュナがいみじくも仰せられたように、く考えている間は本質を理解することはできない。神を覚えることはできない。もつともだ！ 一チヨタク（30グラム）ほどの知性——これでもつて神を理解しようとは！ 一シエル（一リットル）の壺にどうして四シエル（四リットル）の牛乳を入れることができようか？ しかし、アヴァターラを信じるとどういうことになるのか？ タクールはおつしやつた——「もし神が見せて下されば、パーッと一瞬のうちにわかる！」と。ゲータは死ぬ間際に言った——「光を！ もつと光を！」と。あの御方がもし、パーッと光を恵んで下さつたら、（サンスタリットで）チツダンテ、タルバ、サンシャヤ、チツディヤーンテ（すべてのことがはっきりわかるのに！）パレスチナの無学な漁夫たちはイエスに、或いは、シユリー・ヴァース等の信者たちは聖ガウランガに、完全なアヴァターラを見たのだ。

もし神が、パーッと光を恵んで下さらなかつたら、我々はどうしたらいいのだろうか？ なぜ悩む？ タクール、聖ラーマクリシュナがあのようにおつしやつた時、わたしはアヴァターラを信じたではないか。

そう、あのかたは教えて下さったのだ——信じること！ 信じること！ 信じること！ 信じること！
師の言葉を信じること！ そして——

あなたこそ

我が生涯の北極星

この世の海の道しるべ

神の恩寵おんちようによつて、師の言葉への信仰はくが育はぐまれた。師のおつしやることを信じ続けよう。他人は好きにするがいい。神々にあつてさえ稀まれな信仰を、どうして捨てることができよう。もはや理屈にはかまうまい。知的議論の寄せ集めに勤いそむファウストになれ、とでもいうのか？

漆黒しつこくの闇夜、窓から月の光が差し込み、ファウストはただ一人部屋に横たわっている。「ああ、私には何一つ理解できていない。哲学や科学の研究も虚むなしかった。人生をムダにしてしまった！」そう言つて、彼のように毒杯をあおつて自害するといふのか？ それともアラストルのように、無知の重荷に耐えきれなくなつて、岩に頭を横たえて死を待つといふのか？ いいや、こうした悲劇の大学者のように、僅わずかな知性をもつてこの謎を推おし量はかろうとする必要はないのだ。一シエル（エリットル）の容器うづわに四シエル（4リットル）が入らないからといつて、自殺する必要はないのだ。ゲルの言葉への信仰——何て素晴らしいことだろう。おお、神よ、信仰をお与え下さい。虚むなしく彷徨さまよわせないで下さい。

不可能なことは求めさせないで下さい。タクールも教えられたではないか。「あなたの蓮華の御足への純粹な愛と無私の信仰アヘイトキー・バクテが得られますように。不死の魂の深みからほとばしり出る純粹な神への愛をお与え下さい。そして世にも魅惑的な現象マヤに迷わされないように」と。その祝福を給わんことを祈る。

聖ラーマクリシュナの類たぐいなき愛に想いを馳はせつつ、モニは闇夜の家路を辿たどった。彼は独り言った。師はギリシユをどんなに愛しておられることだろう。ギリシユが劇場に行かねばならない時でさえ、家を訪問されている。それだけでなく、彼には、放棄せよとはおっしゃらないのだ。家庭、身内、世俗の活動のすべてを放棄して出家せよ、とはおっしゃらないのだ。その意味は理解できる。期が熟さない限りは——強い放棄の精神が養われない限りは、放棄は苦痛となるだろうことは——。「傷が癒いされないうちにかさぶたを剥はがせば、血が流れて辛い目に遭あうだろう」とタクールご自身もおっしゃっている。だが傷が治れば、かさぶたも自然に剥はがれるのだ。なんの洞察も持たない世間の師は、「直ちに世を捨てよ」などと言うが、無私の恩寵の海なる我がサットグル（真の導師）は慈愛の大海だ。昼も夜も人々へ善を為すことのみを望まれている。

そしてまた、ギリシユの信仰の何たること！ タクールにお会いしたたつた二日後に、「おお、主よ、あなたはまさに神であります。私を救済するために肉体をまとして下生げしやうされたのです」と言ったのだ。「人間の姿を取らないで、どうして神が家族の者のように教えられようか？」とギリシユが言ったの

（訳註2）ドイツの文豪ゲーテの代表作とされる長編戯曲『ファウスト』の主人公の名前がファウスト。

は正しい。神だけが実在で他はすべて非実在であることを、誰が覚さとらせてくれよう。地面に転んだ幼子の手を取って、誰が抱き上げてくれよう。金と女メに目がくらんだ野獸けもののごとき人々を、再び不死の至福に価する者として下さるのは誰なのか？ そしてまた、魂を神に捧げ、神以外の何ものをも愛さない人々は、神が人間の姿をとつて一緒に暮らして下さらなければ、他にどうして人生を送って置くことができよう。それだからギターは語るのだ。

『正信正行の人々を救すけ、異端邪信のともがらを打ち倒し

ダルマ
正法をふたたび世に興すために、わたくしはどの時代にも降臨する』

—— バガヴァッド・ギーター 4・8 ——

何という愛だろう！ ナレンドラに夢中になり、ナラヤンのためにお泣きになる。「ラカール、バヴァナート、プールナ、バブラームなどの若者たちも、ナーラーヤナ神ご自身なのだ。私のために人間の姿を取って地上に生まれてきたのだよ」とおっしゃる。これは人の知性から生まれる愛ではなく、神聖なる愛だ。この少年たちは、まだ性的に女性に触れたことがない純粹な魂だ。まだ、俗事に巻き込まれておらず、欲、自惚れ、嫉妬心などを起こしていない。そのため、彼らの内には、神がより大きく現れているのだ。しかし、そのように見ている人が、誰か他にいるだろうか？ タクールは洞察力をお持ちだ。すべてお見通しだ。世俗に執着している人、素朴な人、高潔な人、神の信者、す

べてご覧になっている。こうした信者には、神ご自身のように仕えて下さる。沐浴させて眠りにつかせて下さる。彼らに会うために泣いて、カルカッタまで駆けつけて下さるのだ。わざわざカルカッタから馬車で彼らを連れて来させるように、他の者に哀願されるのだ。在家の信者には、しょっちゅうお尋ねになる。「あの子達を食事と呼んでやっておくれ。お前のためになることだよ」と。これは世俗の愛だろうか？ それとも純粹で神聖な愛だろうか？ ある者は十六個の道具をそろえて、土でこしらえた神像を神様として拜んでいる。ならば、どうして純粹な人間の体におられる神を拜めないことがあるのか？ その上、彼らはいつの生まれ更わりにおいても、神の遊戯リレーをお支えする魂なのだ！ 神の親密な仲間たちなのだ。

ナレンドラを見ると、タクールは外界をお忘れになる。そして、徐々に肉体としてのナレンドラをお忘れになる。外見上の人間（Apparent man）としての姿を忘れ、真の人間（Real man）だけをご覧になるのだ。不可分のサッチダーナンダ（サット・チット・アナント）（実在・智慧・歓喜）ブラフマンの実体）に心が溶け込むと、口が利けなくなつて不動となられる。「オーム、オーム」と唱えられたり、子供のようになり、「マー、マー」と呼ばれたりする。ナレンドラのなかに神の顕現あらわれをご覧になつて、「ナレンドラ、ナレンドラ」と狂つたようになられる。

ナレンドラは、神が化身して人の姿をとることを信じない。しかし、それがどうしたと言ふのだ。タクールは神眼で見えおられる。ナレンドラは頑かたくなになつていたのだ、と見ておられる。彼（タクール）は、一番身近な身内なのだ。継母まははならぬ実の母親なのだ。なぜ彼は分からせようとしないのか？ な

ぜ、パツと光を灯してくれないのだろうか？　そうだ、タクールはおっしゃったではないか――

。誇りを傷付けられたと思っているのかい？　それは構わないよ。私たちだってそうなんだから。

一番身近な人だからこそ、すねたり、ムツとなって怒ったりするのだ。そうでなかったら、誰に對してそんなことができよう。幸いなるかな、ナレンドラ。至高のあの御方に、かくも愛されるとは！　あなたを見ると、師はいとも容易たやすく神聖な気分になれる。

夜も更よけて、信者たちはこうしたことを思いつつ、聖ラーマクリシュナを心に思い描きながら家路についた。